

## 自然とくらしの 奥深き風景をつくる土木へ

Toward civil engineering that creates attractive landscapes  
where nature and human activities harmonize

東北支部学会誌編集部 部会長：風間 聡

特集担当主査：井上 亮

委員：久保田 健吾、齊木 功、宮内 啓介、山田 真幸

### ABSTRACT

In the midst of a changing natural and social environment, there is a need to create a truly prosperous lifestyle. While the Tohoku region has experienced severe disasters, it has also enjoyed many benefits from its blessed natural environment and resources, and has lived in harmony and symbiosis with nature. In the course of their long-term operation, the civil engineering facilities built to utilize nature's blessings to enrich people's lives have gradually harmonized with the surrounding natural environment, creating attractive landscapes where nature and human activities are interwoven, and contributing to the formation of local pride and culture.

In order to realize truly rich and vibrant local communities in the future, rooted in the natural environment and historical culture of the region, it is necessary to think more deeply about development in which local people are proactively involved and about sustainable infrastructure development. We would like to discuss the views and values that we, as civil engineers, should hold to achieve this goal from a landscape perspective.

### 「自然とくらしの 奥深き風景」と土木

気候変動に伴う自然災害の激甚化や頻発化、少子高齢化や人口の社会移動に伴う人口減少や労働力不足、社会基盤施設の老朽化の急速な進展などの環境の大きな変化の中、改めて、人々にとって真に豊かなくらしの構築が求められている。東北地方は、東日本大震災など数多くの激甚な災害を経験する一方、恵まれた自然環境や天然資源から多くの恩恵を享受し、自然と調和・共生して生活や生業を営んできた。中でも、人々のくらしをより豊かにすべく自然の恵みの活用を目指して作られた土木施設は、長期にわたり機能する過程

で次第に周りの自然環境と調和して各所で魅力的な「自然とくらしの奥深き風景」を形成し、地域の誇りや文化の形成に寄与してきた。

### 「奥深き風景」の形成に 向けた土木技術者の視点や 価値観の議論を

大都市への過度な集中が進むわが国では、分散型国土づくりが求められている。東北地方をはじめとする豊かな自然環境を背景とする地域は、自然と調和・共生したくらしの在り方を先導・具現化することが重要である。そこで、自然の恵みを活用するグリーンエネルギーの導入や、人々のくらしの利便性を向上させるインフラの整備が進められてい



1 気仙沼大島から望む気仙沼湾 / 2 鉄のまち釜石 / 3 第一只見川橋梁(きょうりょう) ※第1回只見線フォトコンテスト最優秀賞「朝焼けの只見線」(提供: 福島県) / 4 鳥海山麓の風車群 / 5 漁港から石巻湾を臨む / 6 真っ直ぐ伸びる桜と菜の花街道 (提供: 大潟村) / 7 下野街道の宿場町、大内宿 / 8 鳴子ダムのすだれ放水 (提供: 国土交通省東北地方整備局)

る。しかし、その風景などに与える影響の大きさなどから批判的な反応を地域の人々から示される場合もある。社会的要請のあるこれらの整備が風景に与える影響について、どのように向き合えばよいのだろうか。加えて、地域の自然環境や歴史文化に根ざし、真に豊かで活力ある地域社会を実現するために、今後、地域住民が積極的に参画したまちづくりや、持続可能なインフラの在り方をより深く考える必要がある。

本特集では、風景という観点から、われわれ土木技術者が持つべき視点や価値観を議論したい。

## 本特集の構成

本特集は、令和6年度全国大会のテーマ「自然とくらしの奥深き風景をつくる土木へ」をより掘り下げる。

最初の鼎談では、「自然とくらしの奥深き風景」が有する魅力を紹介し、その形成に対する土木の貢献と将来への期待を語っていただいた。

次に、自然と人間活動の相互作用で形成されてきた風景が、地域の個性をつくる鍵だと示す。里山の風景

が有する地域の個性・文脈の重要性を論じた記事の後、人間活動がより強く作用した産業景観の事例から、地域文化形成への影響を読み取っていただきたい。

さらに、東日本大震災前の風景や歴史の継承を目指した石巻かわまちづくりの紹介を通して、魅力的な風景づくりの鍵を読者と共有したい。

続く6件の記事は、東北地方各県の特徴的な風景を、形成時代順に紹介する。江戸時代の舟運整備(山形県最上川流域)、江戸末期以降の製鉄業発展(岩手県釜石市)、明治以降のりんご栽培普及(青森県岩木川流域)、昭和初期に開始された鉄道敷設(福島県只見線沿線)、戦後の食糧増産を目指した干拓(秋田県八郎潟)、東日本大震災の復興事業(宮城県気仙沼市)を取り上げる。

最後に、人間にとっての風景の意味を問う議論で、締めくくります。

本特集から、「自然とくらしの奥深き風景」がある地域づくりに向けたヒントを見つけていただき、その実践を通して将来の魅力ある国土の形成の一助となれば幸いです。